

真言教学における生死観

—特に道範の周辺を中心として—

中村 本然

一、問題の所在

生死に関する問題は、仏教者のみならず今を生きるすべての人の関心事である。医学上の心肺停止や脳死を巡る議論を含め、何をもって死とするのかについては、医療分野はいうまでもなく様々な領域において、繰り返し問題提起され議論されてきている。

二〇〇九年六月に臓器移植法改正案が成立し、「脳死は人の死」であることが認定されたことは記憶に新しい。その一方で、十分な検討が尽くされていないとみる有識者も多い。

脳死に関して本川達雄氏は生物学的立場から、自然(界)では起こりえない状況での死を問題にしていると指摘する。自然界の動物は餌をとり食べられなくなれば死、つまりエネルギーの切れ目が命の切れ目である。ところが科学文明の恩恵を受けている人間だけが、その事情が異なる。例えば、病院での死は点滴をして人工呼吸器をつけ、エネルギー(食べ物)を獲得できた状況で、死を議論している。人工的な状況下で体の崩壊が徐々に起こっていくのであるが、そのどこかで線を引いて死としようとしている。そこには、どうやって生きるかを議論せずに、寿命を延ばすことにのみ視点をおいてきた経緯があるのではないか、と手厳しい。^①

生老病死の四苦からの超克を思い立ち、苦行の末に解脱を得たのは仏教の創始者釈尊であった。爾来、四苦は仏教者ひとり一人の問題として、時代を越えて問われ続けている。即身成仏を提唱する真言密教にあっては、この身そのままに仏と成る「生」に比重がお

かれるために、空海(七七四―八三五)以降「死」に関する記述は多く残されていない。

真言密教において、生死の議論が顕著になりはじめるのは、平安後期即ち末法の世が世間に流布しはじめる一〇五二年以降のことと推測され、この時期より真言僧による病中修行や臨終用心に関する論攷が提出されるようになる。

この度の報告では、浄土信仰が盛んになり、往生や安心が議論されはじめる時期の生死観や修行論について、高野山正智院の道範やその周辺の動向を顧みることによって検証することにした。

二、道範の「臨終用心事」に説かれる生死

道範(一一七九―一二五二)の『秘密宗念仏鈔』は、当時隆盛を誇っていた浄土信仰に対する真言密教の対応を示した著書とされ、教史上に秘密念仏思想を形成するに至った論といわれている。この鈔には、真言教学における阿弥陀仏観をはじめ、十念・西方浄土・十六想観・来迎等、密教の教理に基づく考察がみられる。

報告で課題とする生死については「臨終用心事」に詳しい。

夫れ生は不生の生なるが故に、更に来たる処無し。死は不滅の滅なるが故に、亦去る処無し。当に知るべし。阿字縁生の有を生と為し。阿字不生の空を死と為す。是の故に死此・生彼は、唯だ是れ阿字なり^②。

真言教学における生は不生の生であり、新たに生じたりすることはない。また死は不滅の滅であるから、消滅し去りゆくことはない。本不生の根源である阿字(の縁起)によって生じることが生とし、阿字本不生の空に帰入することを死と捉える。真言教学では生滅変化の相に映る生死の様相も本不生なる阿字を離れることはない。

「臨終用心事」の内容に入る前に押さえておきたいのは、臨終に際しての心得を披露することに終始するだけでなく、そのための修行次第を提示することである。臨終についての論証が、教理(教相)とその具体的な実践行(事相)を特徴とする密教の視点から試みら

れている。いうまでもなく真言密教の修行は、修行そのものが如来の覚りや内証の顕われと扱われる。『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論』には

此の菩提心は能く一切諸佛の功徳の法を包蔵するが故に、若し修證し出現すれば則ち一切の導師と爲る、若し本に歸すれば則ち是れ密嚴國土なり、座を起たずして能く一切仏事を成ず、

とあり、密教の修行法によって菩提心を開顯し証得することによって一切の導師となる。そして本源に歸入するにいたれば、そこに密嚴國土が開示され、仏としてのあらゆる教化活動を行なうことになる。

『即身成仏義』で三密行の思想的典拠とされる『成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌』には

法身眞如觀に入つて一縁一相平等なること猶し虚空の如し、若し能く專注して無間に修習すれば、現生に則ち初地に入り、頓に一大阿僧祇劫の福智の資糧を集む(略)。自他平等にして一切如来の法身と共に同じく、常に無縁の大悲を以て無邊の有情を利樂し大佛事を作す³⁾

と説かれ、法身眞如觀の瞑想を行じ、如来の境地と同一となることそのものが、無邊の有情に利益を与え、衆生救済を行なうことに通じると明かされる。

これより貞応二年(一二三三)二月二十一日の消息が残る「臨終用心事」に触れることにする。道範は、臨終の心構えについて仏法の本懐・生死の折角なりとし、心ある仏道修行者は、日々の修行において自らの死について想いを留めておくべきと論じる。道範自身は、臨終に関して書き認めて容易く教示することについて躊躇する姿勢を窺わせながら、敢て初心の修行者のためにその大要を記すことにした旨を述べている。

「臨終用心事」は、病患時を三種に別けて論じられる。三種とは(1)長期病患時(前期)(2)長期病患時(後期)(3)急病時である。

まず(1)長期病患時(前期)は、①諸尊への帰依と懺悔、②三方への廻向、③三金剛觀、④伝法灌頂の印明の結誦、⑤称名、⑥祖師大師への啓白發願、⑦生死本源觀などによって構成されている。修行者が長い間病床に伏して、道場に上堂し行法することができない

場合は、手を洗い口を漱ぎ、護身・結果した後に、①諸尊への帰命と懺悔を唱える。

南無帰命頂礼両部界会。塵数諸尊聖衆。西方極樂阿弥陀如来。観音・勢至九品聖衆。慚愧懺悔六根罪障。無始以来身口意業。入阿字門本来不生。入阿字門本来清浄云云⁵⁾

胎藏・金剛界の両部の諸尊や阿弥陀如来の清浄国土などに帰依し、無始以来の身口意による罪障の懺悔と阿字本不生・阿字門本来清浄(＝阿弥陀如来)への帰入を唱える。

次に②三力への廻向。自らの功德と法界の善根と如来の加持によって、衆生と共に極樂に生まれんことを欣う廻向をした後に、③三金剛観を観念する。この後に、④伝法灌頂の印明の結誦したり、或いは弥陀根本の印明等を結誦し、続いて⑤称名を唱える順序となっている。称名の数については定めていない⁶⁾。得心するまでということであろう。

⑥祖師大師への啓白発願では、弘法大師の御影に対して「南無大師遍照金剛。哀愍加持往生極樂。」と発願する。即ち宿善(の導き)によって今生で密教の教えに出逢い、身を大師の深い禅定に容れて、命(運)を大師の慈悲の内に終えようとしている。これは一重に過去・現在に亘る深き縁しによるものであり、次の生(当生)においても(この縁は)捨てられることはないであろう。願うことは清浄なる淨刹に導いていただけることである。弘法大師の加持護念への感謝の思いと共に、その発露として「南無大師遍照金剛」と唱えることを示唆している。

生死に関する究明は、「⑦生死本源観」にみられる。

次に生死の本源を観ずべし。夫れ生は不生の生なるが故に、更に来たる処無し。死は不滅の滅なるが故に、亦去る処無し。当に知るべし。阿字縁生の有を生と為し。阿字不生の空を死と為す。是の故に死此・生彼は、唯だ是れ阿字なり⁸⁾。

生死に関して道範は、まずその本源を顧みることから説き明かす。密教では、生は不生の生、死は不滅の滅に相応すると捉える。即ち本来不生不滅を本質とする阿字本不生の縁起によって生じる有を生とし、不生の空に帰入することを死と見る。このように一切の諸法は阿字によって生じると定義する。

道範は阿字の思想的根拠を『大毘盧遮那成仏経疏』に求めている。『大毘盧遮那成仏経疏』には、阿字は一切法教の本にして、阿字を離れて一切の言説はなく阿字は総ての声の母である。また三界の語言は皆、名により、名は字によっており、悉曇の阿字はあらゆる字の母と説かれる。

大日経疏の阿字門に云わく。当に知るべし、阿字門真実の義も亦復た是くの如し。一切法義の中に遍ぜり。所以者何んとなれば。一切の法は衆縁に従り生ぜざること無きを以て。縁従り生ずるものは悉く皆、始あり・本あり。今、此の能生の縁を観るに。亦復た衆因縁従り生じて。展転して縁に従う。誰をか其の本と為さん。是くの如く觀察する時は。則ち本不生際を知る。是れ萬法の本なり。猶し一切の語言を聞く時。即ち是れ阿の声を聞くが如し。是くの如く一切の法の生を見る時。即ち是れ本不生際を見る。若し本不生際を見るものは。即ち是れ実の如く自心を知る。実の如く自心を知るは即ち是れ則ち一切智智なり。故に毘盧遮那は。唯だ此の一字を以て、真言と為たまうなり。⁹⁾

と、阿字の真実の義は一切の法教に遍じている。つまり一切の法は縁によって生じるが、縁によって生じるものには始原や本源がある。そのように淵源を尋ねる時に、本来不生不滅なることを知る。一切の語言を聞く時に阿の声を聞くように、一切の法の生じることを見る時に本不生際をみる。本不生際を観るものは、実の如く自心を知ることになる。如実知自心とは一切智智にほかならない。従って毘盧遮那如来は阿の一字をもって真言とする。

ところが凡夫である衆生は諸法の本源を知るにいたらないので生滅あり、と妄りに執着しその流転から離れることができない。あたかも無智な画師が自ら好んで描いた夜叉を観て驚き恐れるようなものである。衆生も同じで、諸法について自己本位に解釈したり、三界についても勝手に思い描いて、諸の苦を受ける。如来の智慧を備えた画師は諸法の本源について熟知しているので自在に大悲曼荼羅を描くことになる。因みに茲に言う大悲曼荼羅とは、大悲胎藏生の十界本有の曼荼羅のことである。十界は本来不生不滅であるから、九界の迷情に惑わされるようなことはなく、大日如来の円満せる徳を具足すると、道範は釈している。¹⁰⁾そして、もし阿字門に基づいて生死の本源を観じるならば、貪瞋癡の三毒や地獄・餓鬼・畜生・人・天の五趣も本来清浄となる。煩惱もそのままに菩提と

なり、生死も即ち涅槃となると結んでいる。

その道範が、衆生は六大が和合して生じると述べる。五大は理、識大は智とされる。但し、衆生の心は顛倒しているので、無明などの十二因縁による流転を繰り広げるが、色心不二を観念することによって輪廻の十二因縁は、『大日経』にいう大日如来の十二の真言王（眞暗𑖧欠𑖧暗𑖧唵 𑖧糝𑖧𑖧素𑖧含𑖧𑖧鶴𑖧𑖧藍𑖧𑖧落𑖧𑖧鑲𑖧𑖧轉）となると説き明かす^[1]。

「臨終用心事」では、六大を随縁転変と法爾不変の別によって説明する。

又六大和合して衆生と成る。其の五大は即ち理。其の識大は即ち智なり。其の心一念顛倒するが故に。十二因縁の流転を成ず。色心不二と観ずれば。則ち輪廻の十二、大日如来の十二の真言王。大羯磨輪と成る。是の故に生死は唯だ是れ六大の随縁転変なり。埋めれば則ち土と為るは、即ち𑖧字の大地なり。焼けば即ち煙と為るは即ち𑖧字の智火なり。六大不変と観ずれば、更に生滅無し。法爾四曼の仏体なり。^{二云云}

始めに随縁転変。生死は六大の随縁転変の相であり、臨終の後に土に変質することは𑖧字の大地への転変であり、煙となるのは𑖧字の智火への変容と捉える。六大の法爾不変の立場からは、生滅の変化はなく、すべては法爾の四種曼荼羅の仏体とする理解を示す。

ここで道範は、称名の時以外の一切時において、口を開く際には阿を、閉じる時には吽を終始観念すべきことを示唆する。阿吽の二字は一切衆生の法爾の秘密真言にして、両部の肝心であり、万徳の本源であるからであると、付記している。

次に(2)長期病患時(後期)。長患いで身体の余力もなく衰弱しているような場合は、𑖧字を観想し、身口意の三業が本来清浄であることを思念し、印を結び、真言を念誦すべきという。

又病患久しく身を侵し。力漸く衰えて澡浴すること能わずんば。心上に𑖧字を想え。三業の本浄を観じて。然して後に印明等を作すべし。

いよいよ臨終という時には、

抑も臨終の心相とは。念を九品の華台に懸くれば、則ち西土の宝蓮に入り。心を五大法界に住すれば、則ち八識の流転を止む。

十界を一如に観ずれば、則ち生死即涅槃なり。一字を五体に布けば、則ち凡身即法身なり。両部を没めて一心に帰し。諸心を撰して無念に終われ。已上六句、皆、印と相応すべし¹³

と、臨終時の心の趣きによって、念を九品の華台に馳すならば西方の浄土に入り、心を五大の法界に及ぼすならば八識の有為転変から離れることになる。地獄・餓鬼等の十界を一如に観念すれば、生死はそのまま涅槃である。阿字等の一字を自らに布置するならば、凡身は即ち法身となる。

道範は、臨終時の身体について坐す・臥すは自由にして、西方浄土の阿弥陀仏にも拘ることなく、自らの所縁(の仏菩薩等)に随って密印を結び、仏の観想をなすべきと明かす¹⁴。

④発願や⑤真言については多様な選択肢を紹介する

其の語業とは。或いは弥陀肝心の文を誦じ。或いは我覚本不生等。或いは八葉白蓮一肘間等。或いは帰命本覚心法身等。或いは若人求仏恵文

或いは法界六大法身形。一一各各一塵体。一一諸塵皆実相。実相周遍法界海。法界即是四曼荼。四曼荼体即一念。心一念即三密体。三密心即是無念。或いは六大無礙常瑜伽要文等。容預、前念、之れを誦すべし或いは只だ宜しきに随ふべし云云 其の真言とは。

或いは六字の名号。或いは五字の真言。以て九品の正因と為し。以て五輪成身と為す。或いは¹⁵一字。或いは¹⁶一字。以て本浄の心蓮を開き。以て不生の圓寂に入るべし。其の印、更に問え¹⁵

④発願については、①阿弥陀仏肝心の文、②「我覚本不生等」の偈頌、③『菩提心論』所説の「八葉白蓮等」の阿字観の偈頌、④「帰命本覚心法身等」の本覚讚、⑤『菩提心論』中の「若人求仏恵」の偈頌⑥「法界六大法身形。一一各各一塵体。一一諸塵皆実相。実相周遍法界海。法界即是四曼荼。四曼荼体即一念。心一念即三密体。三密心即是無念。」の偈頌、⑦「六大無礙常瑜伽等」の二頌八句など修行者の心に従って唱えるべきとする。

⑧真言については、①南無阿弥陀仏(すむみだぶつ)、②¹⁷の五字真言、③¹⁸一字、④¹⁹一字によって本性清浄なる心蓮華

を開いて、阿字本不生の境地に圓寂すべきと明かす。

ともあれ臨終に関する行法・作法によって、出入の息が相応して、氣(息)が絶することを(最)期とみなす。これまで縷々披露した内容についてはそれぞれに思いを留めて用心すべきであるが、あくまでも修行者の病が小康状態にある場合の作法としている。

三つめに(3)急病時。もしも急病によって正に命が尽きようとしている場合は、一印や十念、或いは一印一字によって観想すべきと記す。¹⁶⁾

末尾には臨終用心を総括し、用心の作法については一例を示したに過ぎないので要領に縛られることなく、真言行者の性欲に任せて修すべきであると柔軟な対応を求めている。¹⁷⁾

三、憲深撰『宗骨抄』に説かれる生死

道範と同時期の真言僧にして、道範の周辺との交流が想定される憲深(一一九二—一二六三)が撰述した著に『宗骨抄』がある。¹⁸⁾『宗骨抄』は、題号が表すように真言教学の根本的な教義である真言・陀羅尼・明呪、咒字・篆字・篆字などに関する検討が散見する。室町期の醍醐寺僧・隆増(年代不詳)による奥書が記載されている。

師主の云わく。此の聖教、自門と為すと雖も、一流付法の嫡家に非ざる者に、授けるべからず。若し此の旨に背いて非器に授くる仁者。清瀧の御罰を蒙りて、現世には法の冥加尽き。後世には地獄に墮すべし云々

私に云わく。成賢御住の時の御口説なり。此の一卷は報恩院最極深秘の書なり。他見に及ぶべからず云々¹⁹⁾

『宗骨抄』には真言密教の教義が論じられており、一流即ち報恩院の流れを継承する人以外には無闇に授けてはならない。その趣旨に背いて機根に非ざる者に授ける伝法者(阿闍梨)は、清瀧権現の罰を蒙ることになり、今生での加護も尽き、後生では地獄に墮ちることになる。『宗骨抄』の教理は、実に憲深の師である成賢(一一六二—一二三二)の口訣が網羅されており、報恩院流にとっては最

極深秘の書にして、その流れを汲む人以外に見せてはならないと締め括っている。この『宗骨抄』に、「流来生死大事」と題する考察がみられる。生死については安心(論)との関係において論考が勧められる。空海以降の真言密教では安心という言葉が使用されることはなく、『宗骨抄』が初出とみなされている。

「流来生死大事」では、真言行者が如何にして生死の二法から離れて安心を得ることになるかについての議論が繰り広げられている。

問う。真言行者、生死二法に於いて。如何が安心して彼の生死を離るべき乎。

答う。生死に於いて二種有り。謂う所の一には一期終命の生死。二には刹那無間の生死なり。²⁰

憲深はいう。生死には二種の解釈がある。その二種とは、I一期終命の生死とII刹那無間の生死である。はじめにI一期終命の生死。

初めに一期終命の生死とは。一期の運命、存する程は是れ生なり、運命尽きて他法界に移る、是れ死なり。²¹

命運によって現世に存在することを生とし、運命が尽きて他の法界に移行することを死という。一般的にいわれる死を迎える衆生の姿である。

一期終命の生死に関しては、幾つかの疑問が提出されている。まず一期の後に他法界に生じるとは、心識の依り所となる身体即ち業報の依身を得て他法界に生じるのか、という問いである。憲深の解釈はこうである。

真言者此の²²の深密の教法に値うて。自心是仏の道理を印持決定し。其の後、何ぞ業報所感の身を生ずと云うべき耶。是れ則ち聖果の上の化他利物の生死なり。然れば則ち真言行人。自心即万徳輪円の具徳。諸仏最要の秘蔵なり。一念發起して後、全く自の生死を念ぜず。只、一向に他の衆生を利せんが為に。此の不思議を悟ると雖も、無辺の生死を受く。然りと雖も、受生進退の故に遍法界悉く月輪なり。何くへ去り何くへ行かん。十界悉く²³字なり。何の界を厭わんや。唯だ生死を厭い涅槃を欣うは、初心始行未練の行者なり。深く之れを思うべし。云々²⁴

真言行者は、瑜伽の深い教法に巡り逢い、自心是仏の教理を証得することになる。この境地を離れて、何故に業報所感の依身とし

て生ずることがあろうか。真言教学においては一期終命の生死は、聖果上の(衆生)教化の方便としての生死である。真言行人は自心即万徳にして、輪円なる徳を具している。これは諸仏の最も肝心なる秘蔵である。真言行人は一念を発した後に、自らの生死について思い煩うことはない。ただし、迷える衆生救済のために、密教の不思議の境地を悟っても、多様な生死の様を呈することになる。(遍)法界はすべて月輪にして、何処へ去り何処に往くことはない。十界は悉く阿字本不生の世界であり、真言行人は十界のいずれの界を厭うことがあろうか。生死流転を厭い、涅槃を庶幾うのは未だに修練が至っていない初心の修行者である。

それでは何故に、真言行人は命終して他法界に趣く時に、五大の依身を捨て往くように映るのであろうか。

問う。真言行者。受生進退して。他法界に趣く時。五大の依身を捨すると見たり。若し爾らば、六大の中の五大は此の界に留まり。識大の心法ばかり他界に生ずと意を得るべし耶。若し爾らば、今生所果の五大は。父母始めて之れを莊嚴して依身に儲かる時、自心能住の心法ばかり行きて之れに坐する歟哉²³

もしそうであるならば、六大中の五大は此の世界の留まり、識大(心法)のみ他界に生じることになる。また今生で得る五大は、父母によって依身が儲けられる時に、自心能住の心法が依身を待って備わることになる、という疑念である。憲深の答弁は次のようである。

答う。此れ等の不審は、未だ六大を知らざる前の疑なり。所謂自心の心法。識大とは。則ち我等が出入の命息なり。息風は即ち魂神なり。此の心法の魄神に六大を具足するなり。則ち此の命息風、萬物を吹き撥う徳有り。是れ地大なり。堅性の故に云々。自心息風本体常住不滅堅なるは地大なり。此の命息、湿性有り。是れ水大の徳なり。此の出入の命息に煥気あり、是れ火大の徳なり。此の命息、虚空に出でて。廻転自在なるは空大の徳なり。此の命息、衆生の魂神と成りて了別の性有り、是れ識大の徳なり。此の息風、当体即ち風大なり。我等が四威儀動作、念念声声、此の息風の得る力なり。是くの如く道理必然の故に。我等が命息の心法に六大を具足して。忽ちに其の所念の趣形を建立するなり。全く父母、始めて此の五大を造るに非ず。只、自心の六大を以て。又他界の六大を建立す。形には差別有りと雖も。本より六大をば具す。全く差別無し。²⁴

この不審は、真言教学の説く六大を熟知していないために起こる疑念である。自心の心法である識大とは、(一切衆生の)出入の命息のことである。息風は魂神であり、この心法の魄神に六大を具足する。つまり命息の風には万物を吹き払う徳が備わるが、これは自心の命息の風が本来常住不滅にして堅性なる地大の徳の現れとみる。命息に湿性があるのは水大の徳を表し、出入の命息が暖かな煖氣を具有するのは火大の徳である。またこの命息が虚空に放出され流転自在なる様は空大の徳に相応する。命息が衆生の魂神となつて、識別する性質を具有するのは識大の徳である。そして命息の当体は風大そのものといえよう。このように衆生の心法である命息は六大を具足しており、念ずる所に応じて形を成している。従つて、父母の交流によって始めて五大が造られるのでなく、自心本有の六大によって他界の六大も建立される。形成される六大に種々なる差別は生じても本来的に六大は備わっており、差別の相は認められない。

ところで、今生で得た五大を捨離することについて、憲深は異熟(の)身を捨てることと積する。

但し、眼前に今生所果の五大を捨する事は。異熟の身ばかり捨つるなり。譬えば一切草木の種子。春の縁に遇うて生長せんと欲する時。其の皮甲を捨つ。然りと雖も。秋来たれば本の如く皮甲を具足するが如し。真言行者、他界に生じる時。異熟・依身の五大を捨する事、亦是くの如し。若し此の道理。必定せば六大俱時に母胎に行趣して入胎すべきなり。此れ等は宗の大事にして。師授に依り胸中に収めて全く口外に出でざるなり、然りと雖も末世の鈍心を誘引せんが為に、懷中に之れを記す。穴賢穴賢。余の五大に各六大を具する事。常用に非ざるが故に、之れを記さず。云々⁽²⁵⁾

譬えば、草木の種子が、春という(季節の)縁に触れて生長する時に、種子の皮甲を破り捨てて芽吹き、秋になると実をつけ、やがて皮甲を伴った種子となる。そのように真言行者が、他界に生じる時に異熟・依身の五大を捨離することも同様である。この道理によつて必定して六大が俱なう時に、母胎に行き趣いて入胎することになる。これは真言宗の大事にして、師(阿闍梨)によつて伝法の時などに授けられ、胸中に密かに収められて口外されることはない。いまは末世の鈍根の修行者を導くために、ここに記しておくことにした、とその意図を追記している。

真言行者が、流来生死を離れて生を受けることの理解は得たが、それならば何故に生死の業を捨てることはなく、生を受け進退するように映るのであるか。憲深は、鏡の本質と影像との関係を通して釈明する。

答う。流来生死の業は。影像に依る。本有受生の生死は鏡の本質に由る。鏡、本より萬像を現すれども。その本質、全く実無し。影業、実智を知らざる時は。本質を忘れて影像に依る。故に流来生死如実智の息の時。本質に契当する故に。影像の衆業、皆、本質に帰して引業すべからず。之れを知るべし。云々⁽²⁶⁾

流来生死の業は影像により、本有受生の生死は鏡の本質による。鏡はその性質として万像を映し出すけれども、鏡の本質に万像は存在しない。影像に執われ真実智を解し得ない場合には、影像を本質と捉える。流来生死(の業)が如実智に基づく(息)時には、本質に契うことになり、影像のあらゆる業は本質に帰入し生死流転の業にならない。

いずれにしろ憲深は末法の世に生きる鈍根の真言行者を哀れと感じていた。衆生は赤白二水(父母)によって生じてても二水の本源を知ることはなく、生死流転して止むことはない。もし衆生が上根の人であるならば、父母から生じた時より所縁の境に貪愛と瞋恚の二心を起すことなく、清浄なる朝には法水を身に注ぎ、寂靜なる夕暮れには六大のことを心に描き、父母から生じたこの凡身を捨てずに神通力を体得して、大空の境地に遊ぶことができるのであるが、と心情を告白している。

『宗骨抄』における生死を巡る議論と質を同じくする質疑が、道範の『金剛頂経開題勘註』「此の身を捨てずして頓に仏位を証する事」にみられる。仏位を証得した後、父母から生じた業報の肉身は捨離するか否かという疑問である。

問う。父母所生業報血肉の身、之れを捨てざる歟

答う。禅林の云わく。二義有り。一に云わく。父母所生の身の捨不捨は行者の用心に随い不定なり。仍て八祖の中、多く此の身を捨てて舍利を遺す云云。父母生身無漏五蘊本有常住なり。是れ則ち本有の十界なり。血肉の身を捨てると雖も無漏の蘊は不滅なり。此れに約して即身成仏を論ずる。神魂を以て常住五蘊と為すなり。云云。一に云わく。父母肉身即ち常住無漏五蘊なり。父母肉身に六大を具足す。何ぞ簡別有らん哉。同じく六大法界の全体の故に。全く之れを捨てず。即ち頓に四曼の仏体なり。云云

當山古来より後義に就いて談を為す。八祖の捨身は機の為に示現するなり。父母所生の身に速かに大覚の位を証す文⁽²⁸⁾。道範は、思想的影響を色濃く受けた禅林寺僧都静遍(一一六六—一二三四)の口伝によって、この問題の解決を諮っている。因みに憲深の師である成賢と静遍は共に勝賢(一一三八—一二三二)を師とする兄弟弟子であり、両者(静遍・成賢)は晩年にいたって互いに授かった法を伝授しあう関係にあった。

ともあれ静遍の見解に触れることにする。一説には、父母から生じた肉身の捨・不捨は修行者の用心(方便)によって一定していない。密教を継承した八人の祖師の多くは、(肉)身を捨てて舍利(遺骨)を遺している。父母から生じる生身中の無漏の五蘊は、本有にして常住である。しかも本有の十界でもある。従って血肉の身を捨てるとしても無漏の五蘊は不滅であり、この立場から即身成仏が論じられる。靈妙なる神魂を常住の五蘊とする説である。第二説は、父母の肉身はそのまま本来常住の無漏の五蘊にして、父母の肉身に六大を具足すると捉える。即ちあらゆる存在は六大より生じたものであるから、六大所生である父母の肉身を捨てることはない。古来より二説が唱えられる中で、高野山(教学)では後者の立場を採用している。また此の身を捨てたように見える八祖も修行者の機根や縁に応じて示現する、と釈している。

平安後期から鎌倉期にかけての真言宗では、高野聖などの活躍もあり、高野山浄土信仰や弘法大師信仰が時代の潮流ともなりつつあり、それらの信仰に関する教学的裏付けの必要性に迫られていた。当初から問題提起され、今日でも話題となることに、即身成仏と入定と留身に関する論議がある。道範の『菩提心論談義記』には、密教を継承した祖師方の入寂をめぐる疑義として取り挙げられている。

疑いて云わく。龍智と弘法とは生身にして今在す。即身と云うべし。自余の龍猛等何ぞ即身云う耶。答う。八祖は皆即身頓証の人なり。而も其の肉身の捨不捨は機縁に随い只の果後の方便なり⁽²⁹⁾。

即身成仏を体現された龍智菩薩と弘法大師は生(肉)身のままにこの世に留まっている。それ以外の祖師、例えば龍猛菩薩は『秘密曼荼羅教付法伝』に「蟬の如く蛻けて去んぬ⁽³⁰⁾」とあるように、殻から脱皮する蟬のようにこの世から去り、惠果和尚も『遍照發揮性靈

集』に「人間に示すに薪の尽くるを以てす」³¹⁾とあり、一般的な入滅を想起させる。問題は、龍猛菩薩のように生身を留めない密教者は即身成仏の顕現者であるのか、ということである。即身成仏のための禪定(入定)が、時代の変遷の中で様々な要因が加わり、即身成仏と身を留めること(留身)が同一視されるようになったものと考えられる。道範は『菩提心論談義記』で、密教の祖師方はいずれも即身頓証即ち即身成仏を顕現されており、入寂の後に肉身を捨て去るか否かは、衆生や修行者の機縁による方便としての差異にほかならない、という解釈を示してこの問題に一石を投じている。『菩提心論』所説の「父母所生の身に速かに大覚の位を証す」³²⁾を思想的根拠として即身成仏を標榜する真言教学において、父母から生じた身を再検証する問いであったことが、道範の『金剛頂経開題勘註』や『菩提心論談義記』によって把握される。

さて、その道範は臨終の用心として伝法の印信の大事を主張するが、憲深はどうであろうか。『宗骨抄』には修行者の意に任ずと、伝法の印信に拘らない姿勢をみせている。

問う。真言行者、臨終の時、若しは印信を用うべき耶 答う。用否、意に任ず 云々

重ねて問う。若し之れを用いるならば、何の印信を用うべき耶 答う。習いに依りて尋ぬべし³³⁾

四、『宗骨抄』に説かれる、Ⅱ刹那無間の生死

次にⅡ刹那無間の生死に関して、憲深の『宗骨抄』には

次に刹那無間の生死とは。一切衆生の命息、皆、虚空の天命を以て各々命息と為す。然るに十界の衆生、虚空の一円明の風気を。分々に其の身体の大小に随うて自心中に引入するを自引命息と為す。即ち此の命息の内へ引き入る息、生と云うなり。其の故は法界の一円明の風気を。自心五大の家に引き入れて。我が生を続く故に生と名づく。此の息風、自身の五大の家を出でて。虚空界に住するが故に是れ死なり。此れを去り彼に行く故に。是れを入我我入とも名づく。此の生死は、十界の衆生、皆、内薫の密

益有り。互いに主伴と為す。³⁴⁾

とある。一切の衆生の命息は、虚空の天命を根源とする命息をいう。十界の衆生は、虚空の一なる円明の風気をそれぞれの身体に依じて引き入れて(＝自引命息)、自らの命息とする。命息を引き入れる(個々の)息を生という。法界の一円明なる風気を自心・五大の中に引き入れることによって自らの「生」が続くことになる。逆にこの息の風を自身の五大から虚空界に放つことを「死」という。このように命息が自身に入り、また虚空界に去ることを、入我我入と名付ける。

それでは『宗骨抄』にいう虚空の一円明とは何を指すのであろうか。

彼の虚空の一円明とは。即ち十界の衆生の吹き出す命息。聚集せる天命なり。此の聚集せる天命の一分を。十界随一の衆生の自心の中に引き入るる時。十界の衆生に差別体有りて。各々不同なり、他界衆生、善心を起こして虚空に命息を吹き出だす。自心の中に引き入るる時。我等に塔廟飯食沙門等の無量の慈悲善心、起ること有り。又他界の衆生、悪心を起こして虚空に命息を吹き出だし。自心中に引き入るる時。我等に殺生偷盜等の諸悪業有り。³⁵⁾

虚空の一円明とは、十界の衆生の吹き出す命息であり、それが聚集した天命をいう。この天命の一部を、十界の衆生が自心の中に引き入れるに際して、十界の衆生のそれぞれに差別が生じて決して一様ではない。他界の衆生が善心を起して虚空に命息を吹き出し、それを自心に引き入れる場合には無量の慈悲心や善心が起こる。逆に他界の衆生が悪心を起して虚空に命息を吹き出し、それが自心に入ると、殺生や盗み等の悪業に繋がる。

此の如く真実の眞字の妙法を心に懸けて。行住坐臥に間断せず。生死にも恐れず。涅槃にも住せず。之れを以て大覚と名づく。

亦た証果の聖人と名づく。更に異求すべからず云々³⁶⁾

真言行者は諸法本不生の内実である眞字の妙法を心に保持して行住坐臥に怠ることなく、生死も恐れず、たとえ涅槃に住しても執着してはならない。この境涯を大覚とも証果の聖人とも名づける。阿字本不生の本性以外に左右されてはならない、と憲深は主張する。

五、『宗骨抄』に説かれる平素の用心

真言行者は、一期命終の生死や刹那無間の生死をも超越し離れている。その真言行者の平素の用心について、憲深は「常の四威儀の用心」で左記のように語る。

- 一。仏法に於いて信心の堅固為るべし
- 一。常に身心を散乱ならしめずして。護身結果して身器、清浄にすべし
- 一。此の世界に於いて密厳浄土の觀を成ずべし
- 一。父母所生身。即理智不二の法身。金剛体なりと觀ずべし
- 一。灌頂等の大事、常に心に懸けるべし。
- 一。現世後生を分別すべからず。三世常住の生界・佛界一如平等なりと觀ずべし云々
- 一。本尊に於いて著心を起こすべからず。但し、増長縁なりと觀ずべきなり
- 一。一切諸法に於いて染著心を起こすべからず。常に諸の無自性なりと觀ずべきなり云々
- 一。常に即身成仏の要文を觀誦すべし云々^⑧

まず⑧仏法に対する信心の堅固なることや⑨身心を散乱さすことなく清浄に保つことに始まり、⑩現世を密厳浄土と觀想すること、⑪父母所生の身を理智不二の法身と觀想すること、⑫灌頂の大事、⑬現世と来世を分別することなく衆生界と仏界を一如平等と觀念することなど、修行者としての平素の心構えを列挙している。

殊に『即身成仏義』の二頌八句を常に觀誦すべきと謳っていることは着目しておきたい。

都て即身成仏とは。上に二頌八句の文を以て説き極むなり。金剛なり。然も即身成仏の四字には無辺の恒沙の功德法門を収むる

なり。即身とは我身なり。成仏とは我心なり。此の身心即ち六大瑜珈の法門なり。身は生界。心は仏界なり。是れ既に一如なり。六大亦融通無碍なり。即身成仏の説文、無量なれども。要を取るに二頌八句の文に過ぎず。故に大師、此の文を引いて即身成仏の宗義を釈したまうなり。³⁸⁾

言うまでもなく二頌八句には即身成仏の理念が凝縮されている。実は「即身成仏」の四字には無量なる功德が収められており、即身とは我身、成仏は我心であり、身は衆生界・心は仏界である。即身成仏については数多くの解釈が散見するが、二頌八句に集約されよう。

憲深は、これまで論じた以外の用心について修行者の心に任ずとし、用心の詳細については面授に随うべきであると、言葉を添えている。そして憲深の周辺の事情を髣髴させる内容として『宗骨抄』は末法を生きる鈍根の修行者のために著したことを記している。³⁹⁾但し「常の四威儀の用心」中には肝要なる観法を列挙するに留まり、行法次第にまで体系化されるに至っていないことに留意しておきたい。

六、道範の「尋常行儀の事」に説かれる平素の用心

道範は「臨終用心事」で臨終時の用心や修行論について胸中を披露したが、常日頃の修行に関しても同じ姿勢で臨んでいる。真言密教において即身成仏のための修行や行法次第が重要視される事は論を俟たない。

それでは道範の「尋常行儀の事」を考証することにした。即身成仏を体得するための真言行人の行法の作法には、房中の作法・上堂の儀式・後夜の念誦・護身の次第があり、飲食・衣服、沐浴・往廁などの日常の行住坐臥の作法などがある。その外の要門について、略して十種の観門、六種の助行が存在するという。

十種の観門とは。①(四)無量心(観)②三平等観③両部観④五輪観⑤月輪観⑥阿字観⑦数息観⑧内護摩観⑨即身観⑩十縁生観であり、

六種の助行とは①諸の禁戒を具す②応に随うて起行す③冥衆法施④報謝法恩⑤鎮護国家⑥発願廻向である。十種の観行について

但し、前の十種の観行は。初心の行者、皆、具足して之れを修するには非ず。五輪円明等の観。行者の所樂に随うて。自余の種類の用意し、廢忘すべからず。又唯し一心称名を以て。如上の種類の用心廻向を用うること足んぬべし文⁴⁰

とし、初心の修行者は十種の観門のすべてを修することは難しいので、四無量心観・三平等観・両部観以外の五輪観(五字嚴身観)・月輪観・阿字観などは修行者の浅深や所樂にまかせて行ずべきである。また一心称名(すずり(びん)す)によって、種々の観門や助行とすることは可能である、と論じている。

阿弥陀仏への称名については後に触れることにし、しばらく四無量心観・三平等観・両部観について考察する。十種の観門の最初にあるのが①四無量心観である。

一には無量心。金剛界念誦次第等の如し。故に別に之れを出さず。真言行者は此の教に遇う時。自心の本仏を知るが故に。自証を勞せずして。但し化他に向う。仍って常に四無量の観を作すべし。瑜祇経に云わく。一切処一切事世間染愛及世間一切法に於いて。皆、四撰行の想を生じて慈の鈎、悲の引、喜の縛、捨等を起すべし。〈略〉眼を以て慈を一切に起こし。眼を以て悲を一切に起こし。眼を以て喜を一切に起こし。眼を以て捨を一切に起こす。真言行者。此の教に遇うて常に此の四種の心を起こさば。但し世間の一切の事を作すとも違することなく。速かに無上菩提を証す文四無量即四撰⁴¹

真言行者は密教との出逢いによって、自心が本来仏であることを知ることになり、勞せずして自心即仏を証得し、その思いは自然に迷える衆生の救済に向かうことになる。衆生に向う心とは、慈悲喜捨の四無量心である。道範は四無量心を『金剛峰楼閣一切瑜珈瑜祇経』所説の四撰行によって説明する。一切処・一切法において四撰行の想を生じた後に、慈悲喜捨などを起すべきである。喩えば、眼をもって慈を一切に起こし、悲を起し、喜を起し、捨を起すことになる。密教に巡り逢うことによって、真言行者が四無量心を起こすならば、譬え世間一般的な所業を行なっても、速やかに無上菩提を証することになる。四無量心の冒頭に「金剛界念誦次第等の如し」と明記されるように、この頃までには金剛界などの四度の行法次第が成立していたことが推測される。

次に②三平等観である。三平等とは自三平等・他三平等・共三平等をいう。

二には三平等の観。云わく三平等観とは。先ず本尊を觀じて壇上に安置す。次に我身は即ち印。語は即ち真言。心は即ち本尊なりと觀ずべし。此の三密平等にして法界に遍せり。是れを自三平等と名づく。吾が三平等と本尊の三平等と同一縁相なり。是れを他三平等と名づく。唯本尊と吾が三平等と同一縁相なるのみに非ず。已成・未成の一切諸仏の三平等も亦同一縁相なり。是れを共三平等と名づく。同一縁相なるが故に。真言・印契、等しきが故に諸仏を吾が身中に引入す。是れを入我と曰う。吾が身を諸仏の身中に引入す。是れを我入と曰う。入我我入の故に。諸仏三無數劫の中に修集する所の功德、我が身に具足す。又一切衆生の心中の本来自性の理と。吾及び諸仏の自性の理と。平等にして差別無し。而も衆生は知せず覺せずして生死に輪廻す。茲に因りて我れ衆生の為に悲愍を發す。所作の功德自然に一切衆生の所作の功德と成る。是れ則ち真言行者の利他の行なり。真言行者、手印を作し真言を誦じ。乃至。一切時に恒に斯の觀を作すべし矣^④

まず自三平等とは、本尊を壇上に安置した後に、真言行者が自らの身を印、語を真言、心を本尊と觀念することである。他三平等とは、行者の三平等と本尊の三平等は同一であると觀想すること。共三平等とは、已成・未成の一切の諸仏の三平等も同一と憶念することを用いる。そしてすべては同一縁相であるから、諸仏を行者の身中に引き入れることを入我といい、自らの身を諸仏の身中に引入することを我入という。衆生の本性と我及び諸仏の本性は同一にして差別はないが、衆生は知ろうとも覺ろうともしない。そのような衆生のために慈悲心を起こすことになるが、真言行者の所作の功德は自然に一切衆生の功德となる。これが真言行者の利他の(觀)行である。

続く③両部観は、身体に胎藏生曼荼羅の中台八葉九尊をはじめ四重の円壇(曼荼羅)を觀念し、心月輪に金剛界五智三十七尊を觀想して、胎藏・金剛両部の印を結び、真言を誦じて、法界の衆生を加持し利益せしめる觀法、とされる。

三には両部の観。身の支分に於いて胎の八葉・九尊・三部・四重円壇を觀じ。心月輪に於いて金の五智三十七尊を觀じて。両部の印明を結誦し。法界の衆生を加持して。冥薰密益せしむべし。若し広く四重九会を觀すること能わざれば。但し、胎八葉金五仏種子三昧耶尊

形。之れに観ずべし。⁽⁴³⁾

両部観には、就寝時や起床時の心得についても併記される。

將に寝に就かんとする時は。心蓮華に於いて胎の三部の諸尊を若しくは八葉 一切衆生と同じく無念の自証に住すと想え。一字を誦じて口と出入の息と相応して。漸く眠に入るべし。將に興きんと欲さんとする時には。心月輪に於いて金の三十七尊を觀じて若しくは五智 一切衆生と同じく化他の智用に出ずと想え。一字を誦じて口と出入の息と相応して。漸く起くべし云云 臥時の作法・観念。更に別法有り。之れを問うべし⁽⁴⁴⁾

就寝するに当たっては、心蓮華に胎蔵の三部の諸尊或いは中台八尊を觀想し、一切衆生とともに自証に入住すると観念する。譬えば、阿字等の一字を誦じて口と出入の息とを呼応せしめて眠りに就くべきである。起床時には、心月輪に金剛界三十七尊を觀じ、一切衆生とともに衆生教化の用をしようと思ひ、一字を誦じ、口と出入の息とを相応せしめて起床すべきとある。

④五輪観・⑤月輪観・⑥阿字観は、五字五大転輪や円明の月輪・阿字本不生を觀想することであり、これらの觀法の次第は別にあらることが注記されている。⑦数息観は一字を誦じて出入の息と相応せしめることである。因みに一字には口伝があるという。⁽⁴⁵⁾

八つめの内護摩観は、『金剛峰楼閣一切瑜伽瑜祇經』の經説を典拠とする。但し、未入壇の者は修してはならないと誠めている。八には内護摩観。是れ瑜祇經の所説なり。但し其の法、別に有り。未入壇の者は之れを修すべからず。是れ断惑証入の根本なり。瑜祇經疏に云わく。三妄執・百六十心を以て因と名づけ。五障を業と為す。此の因業を以て柴と為し。三十七智を火と為し、大菩提心の月輪円明を焰と為し。口爐を壇爐とし。法界を量と為し。真言の声を以て燃と為し。印契形を以て焰形と為し。虚空界に遍す。⁽⁴⁶⁾

道範は内護摩観について、安然(八四一一九〇二)の『金剛峰楼閣一切瑜伽瑜祇經修行法』による注釈を試みる。貪・瞋・癡の三妄執や百六十心を因とし、五障を業とする。この因・業を柴とし、金剛界三十七尊の智を火とし、普賢大菩提心の円明を焰とし、口を壇爐とし、法界を量と為し、真言の声を燃とし、印契形を以て焰形と為し、虚空界に遍せしめる、という觀想である。道範当時の真

言密教では、天台教学を大成に導いた安然の思想を意識した教学の検討や再構築がしばしばなされている。

九には即身観。即身成仏を自覚するために、『即身成仏義』所説の二頌八句を観想することがいわれる。十番目の「十縁生の観」は、『大日経』所説の十縁生句を観念し、我・我所の執着を離れる観行とされる。⁴⁷⁾

このような十種の観門は浄菩提心即ち如実知自心を開顕するための肝要の観行であり、真言密教には無量の観行が建立されるが、この十門に集約されるとまとめられている。⁴⁸⁾

六種の助行とは、「一には諸の禁戒を具す」「二には応に随うて起行す」「三には冥衆法施」「四には報謝法恩」「五には鎮護国家」「六には発願廻向」である。⁴⁹⁾ 祖師弘法大師への発願がみられるのは「発願廻向」である。

六には発願廻向。大師の宝前に於いて。花燈香を供し。読経・念誦し。先ず理趣経。次に尊勝陀羅尼。次に御宝号等。懇浄に心をもって。祈請して唱ふべし。⁵⁰⁾

弘法大師の宝前において、華・燈・香を供養した後に「先ず理趣経。次に尊勝陀羅尼。次に御宝号等」を読経・念誦し、白浄なる信心をもって懇懃に祈誓すべきと述べている。

南無大師 遍照金剛 普賢行願 皆令満足 我今一心 発願廻向 生生世世
 随逐奉事 在在处处 值遇密教 今生薰修 三密妙業 所生之处 憶持不忘
 開発衆生 本有善根 発心修行 菩提涅槃 淨仏国土 成就衆生⁵¹⁾

「南無大師遍照金剛」と唱えた後に、真言行人として弘法大師の誓願を自覚するとともに、未来永劫に亘ってこの理念を継承し、衆生本有の善根を開発せしめ、発心・修行・菩提・涅槃そして淨仏国土を衆生に成就せしめることを、誓い願っている。弘法大師の御影を前にしての「理趣経・尊勝陀羅尼・御宝号等」の読経・念誦の次第はその後も継承され、現在の加行にも反映されている。

道範は観門と助行の十六の観行は、諦信を基にして行すべきと締め括っている。諦信が仏道修行の依り所となるからである。

如上の十六種の観行は。皆、諦信を以て地と為して、之れを行はずべし。真言行人。若し信地無ければ。諸行、依なし。大日経疏

に云わく。故に菩提心は即ち是れ白淨信心の義なりと。釈論に亦云わく。仏法の大海には信を以て能入と為す等文（略）
 顯宗は信を以て初門と為す。自宗は信を以て頓証す。是の故に如実知自心と諦信とを行体と為るが故に。今、別の義門と立てざるなり。⁸²⁾

『大毘盧遮那成仏經疏』には、菩提心とは白淨の信心とあり、『大智度論』には仏法の大海に入るには信によるといわれる。⁸³⁾このように信は仏教信仰の最初に位置する。顯教における信は仏道信仰の初門に過ぎないが、真言密教では諦信がそのまま頓証とされる。「尋常行儀事」は『秘密宗念仏鈔』に収められている。末法の世に俄に流行し始めた浄土信仰に対する真言密教を論じた著とされるが、阿弥陀仏を巡る諸問題について詳細である。真言密教における阿弥陀仏は、究極的には修行者の心蓮である淨菩提心が開かれた様相とされる。阿弥陀仏は、菩提心を開き即身成仏するための仏として強調されることになる。

是の故に真言行人。尋常の時は毎日三時乃至一時。三密壇に就いて或いは護摩或いは行法。退転すべからず。其の余の時は密の念仏に住すべし。年来、余の仏・菩薩・明王・天等の一本尊の所に於いて。薰修を積むこと有らん者は。その行を退せず。以て往生の因と為すべし。所以者何となれば。諸仏の願行は皆悉く同一にして。衆生をして出離入証せしめんが為なり。其の要門とは即ち是れ弥陀の念仏三昧なり。是の故に諸仏は皆、此の願を助く。何ぞ其の薰修の業を弃捨すべけんや。況や復た一切の諸仏は。唯だ是れ弥陀の一法身なり。一切の諸行は唯だ是れ弥陀の一名号なり。早く開会の眼を開いて。取捨の想を作すこと勿れ。⁸⁴⁾

『秘密宗念仏鈔』には、真言行人は日常において、毎日三時・或いは一時に、壇上や護摩や三密の行法を怠ることなく修すべきである。三時以外の余暇には密教の念仏を修すべきと説示される。阿弥陀仏以外の仏・菩薩明王等を信仰してきた修行者は、それまでの修法を捨て切り離すことなく往生のための行法とすべきと導いている。あらゆる仏・菩薩の願行は、衆生を出離入証せしめたいと願っているからである。もし要門を問われるならば、阿弥陀仏の念仏三昧に収斂される。一切の諸仏は阿弥陀の一法身であり、すべての行は阿弥陀仏の名号に尽きると述べている。

このように南無阿弥陀仏(すみなす)の六字の名号には諸徳が円満しているので、一心に称名念仏するならば阿弥陀仏の浄土に

往生することになる。それならば何故に思い煩いながら多種多様な行法を行なう必要があるのか、と率直な問いが投げかけられている。

問う。弥陀六字の名号に萬徳円備せり。一心に称名すれば、極楽に往生す。何ぞ煩わしく此の如く観行を修せん乎

答う。萬行は阿字を出でずと雖も。諸の性欲に随うて方便門を開き。一切智智の道を宣説するなり。正智と方便との二を具足する。是れを輪円と名づく。故に大日経疏に。龍樹の云わく。般若と方便とは本体是れ一なり。而も所用に異有り。譬えば、金師の巧方便を以ての故に。金を以て種種の異物を作す。皆、是れ金なりと雖も。而も各々異名あるが如し。今毘盧遮那も亦復此の如し。能く遍一切処の真金の智体を以て。種種の業を造る文⁵⁵

道範は答える。総ての修行は阿字(本不生)を出ることはないが、修行者の性欲に随って方便として多くの修行の法門を開いて一切智智への道を知らしめているのである。輪円とは般若の正智と方便が備わることである。譬えば『大毘盧遮那成仏経疏』にあるように、鍊金師は巧方便によって種々なる形の異なるものを造り出すが、造形されたものはすべて金を内実としながらも与えられる名称が異なるのと同様である⁵⁶。ともあれ阿弥陀仏の修行も十種の観行も、阿字本不生を離れることはない。

七、道範の阿字観

この時期の真言密教の特徴として、阿字本不生の教理に関する詳細なる検証と併せて、具体的な実践法である阿字観へと展開していることが指摘されよう。その証左として阿字(観)に関する著述が数多く提出されている。道範には『道範消息』などの著作がみられる。

この観に契証する時は、十界ことごとく阿字なり。無間の猛火、餓鬼の飢渴、畜生の残害しかながら阿字の性徳なり。密嚴の淨刹・華嚴の蓮都・安樂・都率ことごとく阿字の外用なり。是くの如く意得候ぬれば、地獄をも厭わず、淨土をも欣わず、染淨

に著せず、善悪に驚かず、有仏の処にもとどまらず、無仏の処にもとどまらずして、同じく超過して、不二の寂都に遊ぶなり。もとより不生の生なれば、始めて生ずべき生も無し。もとより不滅の滅なれば、始めて死すべき滅も無し。生滅ともに常住なれば、金剛不壞の法身、我等が色身なり。〈略〉

蠢蠢たる六道の含識しながら阿字微妙の形体なり。沈々たる三界の群類ごとく不生寂靜の心地なり。螻蟻蚊虻をも賤しむべからず、古仏の普賢身なり。中台の遮那も貴むべからず。自心臥具の阿字なればなり。

又依報の国土は即ち圓明無作の阿字の宮殿なり。〈略〉昼は五智圓明の阿字密宮に遊び、夜は四徳解脱の阿字本有の床に臥し候。いわんや又出入の息風、即ち阿字なれば行住坐臥即ち恒時不断の念誦なり。睡眠無心の時も断絶すべからず、麁言罪語もことごとく秘密真言なり。⁶¹⁾

阿字觀に相い契う時には、十界は悉く阿字である。地獄の猛火、餓鬼の飢渴、畜生の殘害にいたるまで阿字の性徳であり、また密嚴の淨刹、華嚴の蓮都、阿弥陀仏の極樂、弥勒仏の都率はすべて阿字の隨縁である。このような境地に達するならば、地獄を厭うことにも淨土を欣うことにも執着することなく、善・悪にも驚くこともなく、有仏・無仏にも拘ることなく、一切を超越して不二自性法身の寂靜なる淨土に遊ぶことになる。

阿字本不生の境涯においては、本来不生の生であり始めて生ずべき生もなく、元来不滅の滅であるから始めて死すべき滅もない。生滅ともに常住であり、金剛である不壞の法身は正しく我等(衆生)の色身といえよう。

蠢く六道輪廻の衆生も阿字の形体であり、欲界等の三界のあらゆる住者も阿字不生の心地に根ざしている。螻蟻蚊虻なども賤しむべきでなく、それらは古仏の普賢の身に等しい。胎藏生曼荼羅の大毘盧遮那如来も自心本具の阿字であるから、殊更に貴ぶこともない。

また依報の国土は、円明なる阿字の宮殿である。密教の修行によって、昼には五智の円かなる阿字の宮に遊び、夜は常・樂・我・淨・解脱・涅槃の阿字本不生の床に臥すことになる。出入の命息の根源は阿字であるから、行住坐臥において自然に不断の念誦となっ

ており、就寝中であっても阿字の息風が途絶えることはない。このように粗雑な言語も本源を尋ねれば秘密真言である。

また『光明真言四重釈』には

凡聖迷悟。自行化他。煩惱菩提。生死涅槃等の二法は。是れ両部大日の化現。胎金蓮月の交相なり。〈略〉此の光明真言も文字多しと雖も。初めの𑖀字終りの𑖀字を体と為す。是れ即ち両部一体の真言。胎金不二の明呪なり。〈略〉此の故に且く𑖀字の一𑖀字を以て光明真言と為す。一切諸仏菩薩無量無辺甚深内証の真言 皆𑖀字に納まる。⁵⁸⁾

と、凡・聖、迷・悟、自行・化他、煩惱・菩提、生死・涅槃等の二法は、いずれも両部大日の化現であり、胎・金の蓮華・月の随縁相である。光明真言は初めの𑖀字と終りの𑖀字を体とする。𑖀・𑖀は胎藏生・金剛界の両部不二の真言である。更に光明真言は𑖀字に収斂される、と解している。

八、憲深の𑖀字観・九重月輪観(九重阿字)

『宗骨抄』の「𑖀字萬法総体事」には阿字について、

夫れ𑖀字とは萬法の根源。法界の像質なり。是れを以て萬法の生じるを即ち阿字縁起の生なり。法界の滅するも𑖀字随縁の滅なり。然れば則ち有体無形も𑖀字の当体ならずということなし。諸の言音名字も亦、皆悉く𑖀字の声字なり。⁵⁹⁾

と、本不生を内容とする𑖀字は万法の根源にして法界すべての影像の本質である。一切の万法は阿字の縁起によって生じ、法界の生滅変化は阿字の随縁相である。随縁の有体・無形の相は阿字本不生を離れるものではない。あらゆる言音や名字もまた𑖀字の声や字の所現である、と明かす。

『宗骨抄』は、阿字観とも密接に関わる「九重月輪観」について詳論する。それはどのような観法であろうか。この九重の月輪について、憲深は三説を掲げる。

問う。真言行を修する者。九重月輪を觀ずと見たり。其の月輪の九重なる、方に如何。

答う。月輪の九重に於いて三説あり。共に皆、説かれる所、分明なり。其の三種の様。或いは八葉の如く九重なり。是れ尊勝破地獄軌に由る。或いは月輪の九重、繞りて重ぬ。青龍軌に由る。或いは豎に九重なり。九識と之れ習う。塔の九輪と之れ習う。

同じ事なり。善無畏の尊勝破地獄儀軌に云わく。九重月輪は八葉九尊の義を表す。文⁶⁰

即ち、一には、八葉の蓮華のように、ひとつの月輪を中心に九つの月輪を觀想する説。

二つには、大きさがひと回りずつ異なる月輪を九重に重ねて觀想する説。

三つには同じ大きさの月輪を豎に九つ並べて、(簷え立つ)塔のように觀想する説

まず初めの説は、善無畏(六三七―七三五)訳の『仏頂尊勝心破地獄轉業障出三界秘密三身仏果三種悉地真言儀軌』にある経説「九重月輪は八葉九尊を表す」⁶¹による。胎藏生曼荼羅の中台八葉九尊のように、大日如来を象徴する阿字を描いた月輪を中心に、八つの月輪を周辺に配して觀想するのである。

広沢僧正の記に云わく。九重月輪とは九尊の位なり、文 大師の御次第に云わく。次に𑖀字九重の光輪を 五股印を用い𑖀字を觀ずべし、心中八葉の蓮花を觀じて。蓮花上に𑖀字九重九輪在り、文

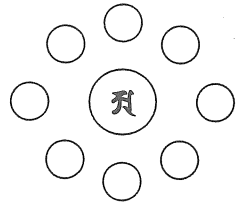
師の云わく。此の九重の毎重に𑖀字有り。變じて月輪と成る。其の位所即ち行者胸中の八葉蓮花台是れなり。次第分明の故に。

又濟暹僧都、熾盛光仏頂経を以て本説と為す。中台の八葉に九箇の月輪を安ず。各𑖀字有り云々⁶²

広沢僧正(寛朝(九一六―九九八)カ?)の記には、九重月輪について中台八葉の九尊のようにとあり、弘法大師の次第には、心中に八葉の蓮華を觀じ、その蓮華上に𑖀字の九重九輪を觀想する、と説かれる。併せて五股印によって阿字を觀することも記される。

憲深の師の成賢(一一六―一二三二)は、九重毎に𑖀字があり、この阿字が變じて月輪と成る。この九重月輪は行者の心中の八葉蓮華のことである、といい伝えている。濟暹僧都(一〇二五―一一一五)は『大妙金剛大甘露軍拏利焰鬘熾盛仏頂経』⁶³を典拠として、中台八葉に九箇の月輪を安置し、それぞれに𑖀字を觀想することの解釈を施している。

①〈尊勝破地獄軌〉説



②〈青龍軌・撰大軌〉説



③異説



二つめの説は、法全(生没不詳)が大中年間(八四七—八五九)に青龍寺で撰述したと伝えられる『大毘盧遮那成仏神変加持蓮華胎藏菩提幢標幟普通真言藏広大成就瑜珈』の「輪圍九重なり。虚圓にして白なり」の経説や論婆迦羅訳『撰大毘盧遮那成仏神変加持經入蓮華胎藏海会悲生曼荼羅広大念誦儀軌供養方便会』の「嚴整水輪中 輪圍成九重」の文を根拠として、月輪を重ねて山のように観想する説である。文中に続いて引用される『大原抄』とは、天台の大原流を開いた長宴(一〇一六—一〇八二)の抄であろうか。この書に九重の月輪とは心中の九識のことを指し、その中心に「九」字を観じることによって、初めて衆生本有の種子を生起する、との解説がみられる。憲深の師である成賢は他門の説ではあるが、真言門と真意が通じるとし、容認する立場をとっている。

大原抄の二十七に云わく。九重の月輪は是れ九識の即心の理の故に。最中の輪に於いて「九」字を観ず。即ち是れ初めて聖胎の種子を起す、文

師主の云わく。此の抄の主の意、他門なりと雖も、道理、自門に同じ。

三つめには、形・大きさが同じ九つの月輪を塔のように観想する説である。

私に云わく。其の形・大きさ皆同じ

師の云わく。此の様は別に未だ本説を勘えず。只、先説文の異を以て此の如く観ずる歟。此の九重月輪とは。土器を九つ重ねたるが如く観するなり。是れ九識、転じて法門の表示として事相に顕わす時。塔の上の九輪是れなり

師成賢は、この説の思想的な背景を究明するにいたっていない。第二説の異説にして、土器を九つ重ねるように観想する観法と紹介する。九識を転じ、五智の証得を主張する真言密教の具体的な修行方法として、九輪を塔のように観念する説である。

九、まとめ

真言密教における生死観について、平安後期から鎌倉期に活躍した道範や憲深を中心に考証した。両者の著書には、末法の時代を意識した配慮が窺われ、混乱する世を生きる初心(鈍根)の者のために、真言行者としての心構えや修行次第を撰述した経緯が残されている。論考を通して次のような結論を導き出すことを得た。

道範は生死について、「臨終用心事」の中で、生は不生の生、死は不滅の滅であり、阿字本不生を本源とする縁起によって生じるところを生とし、本不生の空に帰入することを死としている。「臨終用心事」は、臨終を迎えるにあたっての真言行者の心構えとそのため
の修行次第(①諸尊への帰依と懺悔、②三力への廻向、③三金剛観、④伝法灌頂の印明の結誦、⑤称名、⑥祖師大師への啓白発願、⑦生死本源観)によって構成されている。⑦生死本源観は、生死に関する教学的検証がなされ臨終用心の中核となっている。

「臨終用心事」で指摘しておくべきことは、生死の本源に関する理念を開示するのみではなく、本不生を体認するための具体的な方法を提案することである。

「尋常行儀事」もその主旨を同じくしている。この中の「(四)無量心(観)」には金剛界念誦次第等に触れられており、十八道次第などの四度の行法次第が既に調べていたことが推測される。また祖師空海への廻向「理趣経・尊勝陀羅尼・御宝号等」の読経・念誦は、現在の加行次第にも反映されており、真言密教の修行論(事相)の形成過程を考証していく上でも興味をひかれる事例と考えられる。

「尋常行儀事」「臨終用心事」に共通して設定されているのが、弘法大師への発願である。大師信仰の所産である「南無大師遍照金剛」の宝号が明瞭な形で認められることを併せて記しておきたい。

憲深の『宗骨抄』には生死観について、阿字本不生は方法の根源にして法界すべての本質である。一切の方法は阿字の縁起によって生じ、法界の生滅変化は阿字の随縁相に過ぎない、という理解に基づく展開が散見する。憲深は、生死を二種の解釈によって取り上げる。一期終命の生死と、刹那無間の生死である。一期終命の生死は一般にいう臨終における生死にして、刹那無間の生死は日常における生死である。

『宗骨抄』には、臨終時の業報の依身や六大(縁起)などに関する質疑が起こされているが、憲深は六大法爾常住の教義による論証を試みている。同様の議論として、道範の著には即身成仏時の肉身の扱いが問題として提起されている。背景には弘法大師信仰における即身成仏と入定・留身を巡る議論が想定される。

また憲深と道範の両者がともに尋常行儀の観法として『即身成仏義』の二頌八句の観誦をすすめていることにも注目しておきたい。ともあれ憲深が識別して論じた一期終命の生死と刹那無間の生死に呼応するように、臨終用心と尋常行儀の心構えや修行方法などが勘案されるにいたったことが推測される。そして真言密教の生死観の基本概念である阿字本不生は、より洗練された阿字の理論や阿字観として結実していくことが、道範の『道範消息』『光明真言四重釈』や憲深の『宗骨抄』によって把握されよう。

註

- (1) 『長生き』が地球を滅ぼす』本川達雄
 - (2) 『秘密宗念仏鈔』〈真言宗安心全集〉下二六四
 - (3) 『金剛頂瑜珈中発阿耨多羅三藐三菩提心論』(『十卷章』二二九)
 - (4) 『即身成仏義』(『十卷章』二五—二六)『成就妙法蓮華經王瑜珈觀智儀軌』『大正藏』一九・六〇二a)
 - (5) 『秘密宗念仏鈔』〈真言宗安心全集〉下二六三
 - (6) 『秘密宗念仏鈔』〈真言宗安心全集〉下二六三
 - (7) 『秘密宗念仏鈔』〈真言宗安心全集〉下二六三—二六四
 - (8) 『秘密宗念仏鈔』〈真言宗安心全集〉下二六四
 - (9) 『大毘盧遮那成仏經疏』〈大正藏〉三九・六五一c)
 - (10) 『秘密宗念仏鈔』〈真言宗安心全集〉下二六四
 - (11) 『大毘盧遮那成仏神變加持經』〈大正藏〉一八・三二c)
- 爾時金剛手。昇於大日世尊身語意地。法平等觀。念彼未來衆生。爲斷

一切疑故。說大真言王曰

南麼三曼多勃駄喃一阿三忙引鉢多二合達摩駄靺二夔登底孕反夔哆喃三
薩婆他引四暗引欠引暗嚙五糝索六含鶴七藍落八饒嚙急呼九莎訶部十藍
落訶嚙二合鶴十一莎訶藍落十二莎訶十三

持金剛秘密主。說此真言王已。時一切如來。住十方世界。各舒右手摩
執金剛頂。以善哉聲而稱歎言。善哉善哉佛子。汝已超昇毘盧遮那世尊
身語意地。爲欲照明一切方所。住平等真言道諸菩薩故。說此真言王。

何以故。毘盧遮那世尊應正等覺。坐菩提座。觀十二句法界。降伏四魔。
此法界生。三處流出。破壞天魔軍衆。次得世尊身語意平等。身量等同
虛空。語意量亦如是。速得無邊智生。於一切法自在而演說法。所謂此
十二句。真言之王。

- (12) 『秘密宗念仏鈔』 〔真言宗安心全集〕下二六四—二六五〕
 (13) 『秘密宗念仏鈔』 〔真言宗安心全集〕下二六五〕
 (14) 『秘密宗念仏鈔』 〔真言宗安心全集〕下二六五〕
 (15) 『秘密宗念仏鈔』 〔真言宗安心全集〕下二六五〕
 (16) 『秘密宗念仏鈔』 〔真言宗安心全集〕下二六五〕
 (17) 『秘密宗念仏鈔』 〔真言宗安心全集〕下二六五〕
 (18) 『宗骨抄』 〔真言宗全書〕二二・一七七〕
 (19) 『宗骨抄』 〔真言宗全書〕二二・一九一a〕
 (20) 『宗骨抄』 〔真言宗全書〕二二・一八七b〕
 (21) 『宗骨抄』 〔真言宗全書〕二二・一八七b〕
 (22) 『宗骨抄』 〔真言宗全書〕二二・一八八a〕
 (23) 『宗骨抄』 〔真言宗全書〕二二・一八八ab〕
 (24) 『宗骨抄』 〔真言宗全書〕二二・一八八b〕
 (25) 『宗骨抄』 〔真言宗全書〕二二・一八八b—一八九a〕
- (26) 『宗骨抄』 〔真言宗全書〕二二・一八九a〕
 (27) 『宗骨抄』 〔真言宗全書〕二二・一九〇a〕
 (28) 『金剛頂經開題勘註』 〔統真言宗全書〕七・八b〕
 (29) 『菩提心論談義記』 〔日本大藏經〕四七・三四六a〕
 (30) 『秘密曼荼羅教付法伝』 〔弘法大師全集〕一・八〕
 (31) 『遍照發揮性靈集』 〔弘法大師全集〕三・四二三〕
 (32) 『金剛頂瑜珈中禿阿耨多羅三藐三菩提心論』 〔十卷章〕二一九〕
 (33) 『宗骨抄』 〔真言宗全書〕二二・一八九a〕
 (34) 『宗骨抄』 〔真言宗全書〕二二・一八七b〕
 (35) 『宗骨抄』 〔真言宗全書〕二二・一八七b—一八八a〕
 (36) 『宗骨抄』 〔真言宗全書〕二二・一八八a〕
 (37) 『宗骨抄』 〔真言宗全書〕二二・一九〇ab〕
 (38) 『宗骨抄』 〔真言宗全書〕二二・一九一a〕
 (39) 『宗骨抄』 〔真言宗全書〕二二・一九一a〕
 (40) 『秘密宗念仏鈔』 〔真言宗安心全集〕下二六三〕
 (41) 『秘密宗念仏鈔』 〔真言宗安心全集〕下二五六—二五七〕
 (42) 『秘密宗念仏鈔』 〔真言宗安心全集〕下二五七〕
 (43) 『秘密宗念仏鈔』 〔真言宗安心全集〕下二五七〕
 (44) 『秘密宗念仏鈔』 〔真言宗安心全集〕下二五七—二五八〕
 (45) 『秘密宗念仏鈔』 〔真言宗安心全集〕下二五八〕
 (46) 『秘密宗念仏鈔』 〔真言宗安心全集〕下二五八〕
 (47) 『秘密宗念仏鈔』 〔真言宗安心全集〕下二五八—二五九〕
 (48) 『秘密宗念仏鈔』 〔真言宗安心全集〕下二五九〕
 (49) 『秘密宗念仏鈔』 〔真言宗安心全集〕下二五九—二六一〕
 (50) 『秘密宗念仏鈔』 〔真言宗安心全集〕下二六一〕

- (51) 『秘密宗念仏鈔』《真言宗安心全集》下二六二〇
- (52) 『秘密宗念仏鈔』《真言宗安心全集》下二六二〇～二六三〇
- (53) 『大毘盧遮那成仏経疏』《大正蔵》三九・五八七a
- (54) 『秘密宗念仏鈔』《真言宗安心全集》下二六五〇
- (55) 『秘密宗念仏鈔』《真言宗安心全集》下二六五〇
- (56) 『大毘盧遮那成仏経疏』《大正蔵》三九・五八五b
- (57) 『假名法語集』《日本古典文学大系》岩波書店八〇〇～八二〇
- (58) 『光明真言四重釈』《真言宗安心全集》下七八一七九
- (59) 『宗骨抄』《真言宗全書》二二・一八〇b
- (60) 『宗骨抄』《真言宗全書》二二・一八五a
- (61) 『仏頂尊勝心破地獄転業障出三界秘密三身仏果三種悉地真言儀軌』
《大正蔵》一八・九一三c
- (62) 『宗骨抄』《真言宗全書》二二・一八五ab
- (63) 『大妙金剛大甘露軍拏利焰鬘熾盛仏頂経』《大正蔵》一九・三三九
- (64) 『大毘盧遮那成仏神変加持蓮華胎蔵菩提幢標幟普通真言蔵広大成就瑜
珈』《大正蔵》一八・一四四c
- (65) 『撰大毘盧遮那成仏神変加持経入蓮華胎蔵海会悲生曼荼羅広大念誦儀
軌供養方便会』《大正蔵》一八・八五c
- (66) 『宗骨抄』《真言宗全書》二二・一八五b
- (67) 『宗骨抄』《真言宗全書》二二・一八五b

△キーワード▽

一期終命の生死・刹那無間の生死・業報の依身・成仏と入定留身・阿
字本不生・真字観